

第 2 章

小学部の研究

小学部

I 研究概要

1 小学部の現状と課題

1-1 小学部の現状

1-2 小学部の課題

2 今年度の取組

2-1 各教科等の見方・考え方を発揮させる授業づくりの要点について

2-2 「単元を通して目指す姿」の設定方法について

II 実践報告

実践報告 1 小1組 「クリスマスパーティーをひらこう」

実践報告 2 小2組 「おこめだいへんしん～のりまきをつくろう～」

実践報告 3 小3組 「3くみどりーむショップをひらこう！」

III 研究のまとめ

1 『『確かな学び』を育むための授業づくりの要点』の成果

2 「単元計画評価シート」活用成果

2-1 単元計画の作成について

2-2 「単元を通して目指す姿」について

3 今後の実践に向けての課題

3-1 「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」について

3-2 「単元計画評価シート」について

3-3 「確かな学び」の見取り方の課題

※実践報告ページの QRコード から「単元計画評価シート」をご覧ください。

I 実践報告	
実践報告〇	
生活単元学習「〇〇〇〇〇〇〇〇」	
〇〇〇〇・〇〇〇〇・〇〇〇〇	
■〇学部 第〇学年)	
1 単元について	
(1)単元観	

〇学部

SAMPLE

※公開する「単元計画評価シート」は、個人情報への配慮から、「単元計画シート」、「単元評価シート」、「授業計画評価シート」、「『確かな学び』見取りシート」の一部となります。また、公開終了は、令和7年度8月頃を予定しています。

I 研究概要

1 小学部の現状と課題

1-1 小学部の現状

小学部では、児童の障害や発達の段階を把握し、興味・関心に沿って、児童一人一人が進んで取り組める教育活動を展開することが重要だと考えている。そのため、生活に即した学習や体験的な学習を意図的に組み込み、児童の興味・関心に基づいて、のびのびと遊んだり、学習や運動に生き生きと取り組んだりする姿を引き出してきた。また、このような教育活動を通して、各教科等の指導の内容を効果的に学ぶための指導形態である「合わせた指導」として、日常生活の指導と生活単元学習の充実を図ってきた。

(1) 日常生活の指導

各学級で行う「日常生活の指導」では、自然な生活の流れの中で、衣服の着脱や、排泄、食事の仕方等の基本的な生活習慣、朝の会・帰りの会、遊び、簡単な係活動といった学習活動を設定している。主なねらいは、「自分自身や身のまわりのことに目を向け、自分から取り組もうとする」「日常生活において必要な基本的な習慣や技能を身に付ける」「集団活動に参加し、簡単な決まりやマナーを知ったり、自分の役割を果たしたりする」の3点である。これらのねらいを達成するための具体的な手立てとして、教室環境や掲示等を学部内で統一し、第1学年から第6学年の各段階の中で、少ない支援の中で自分から取り組めるようにするなど、自立を促していくことを教員集団で共有している。

(2) 生活単元学習

各学級または、単元によっては学部合同で行う「生活単元学習」では、児童の身近な生活から社会生活へとつながっていく様々な題材を用い、興味・関心を広げながら主体的に役割を果たしていく体験的な学びの機会を設定してきた。具体的な学習活動としては、「運動会をがんばろう/宿泊学習をしよう/修学旅行に行こう」等の行事に関わる単元、「学校探検をしよう/町探検をしよう」等の社会生活に関わる単元、「ボウリングであそぼう/おみせごっこあそび」等の遊びに関わる単元、「夏祭りをしよう/お掃除隊出動」等、各学級の目標や児童の興味・関心が高い内容等をテーマとした単元が挙げられる。このように、児童にとって日々の学校生活の中で必然性のある学習課題や生活年齢に応じた学習課題を設定することで、個々や学級集団における課題に迫れるようにしている。併せて、児童がすでに獲得している知識や技能、得意なことを活かそうとする力の育成を大切に考えている。

1-2 小学部の課題

昨年度までの研究における課題として、「合わせた指導」の中で、各教科等の内容をより効果的に学ぶ方法が不明確となっている点が挙げられた。また、各教科等の目標・内容を取り入れた単元の計画・評価を行ったが、単元間の繋がりが不明確となっている点も挙げられた。そのため、「その単元の教科等の内容が前後の単元とどのように関連しているか」や、「その単元における教科等の学習評価を今後の単元へどのように活かしていくのか」、「『合わせた指導』の中で児童がより効果的に各教科等の内容を学ぶにはどのような授業を行えばよいのか」などについては明確に示すことができていなかった。

2 今年度の取組

2-1 各教科等の見方・考え方を発揮させる授業づくりの要点について

小学部では、生活単元学習の中で、より効果的に各教科等の内容を学ぶことができる授業づくりを目指して、そのための授業づくりの要点をまとめることとした。課題として挙げられた、各教科等の内容が効果的に学べていないと教員が感じる理由として、教員が指導を行う際に学習指導要領の指導内容に書かれている文言にとらわれてしまい、指導が表面的になっているのではないかと考えられた。そこで、教員が各教科等で身につけさせたいことの本質を意識できるように、「各教科等の見方・考え方」に着目して3年次の研究を進めた。まず、児童が授業の中で各教科等の見方・考え方を発揮するために大切だと考える視点を絞り、それらをどのように単元や授業の計画に反映させるかを検討し、実践を行なった。全ての教科等について検討することはできなかったため、今年度は「国語科」と「生活科」に絞って検討を行った。生活科では、特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（以下、「学習指導要領解説」とする。）によると、見方・考え方はそれぞれ以下のように説明されている。

見 方：生活を捉える視点であり、生活における人々、社会及び自然などの対象と自分がどのように関わっているのかという視点

考え方：自分の生活において思いや願いを実現していくという学習過程の中にある思考であり、自分自身や自分の生活について考えることやそのための方法

これらを授業の中で活かせるようにするために、以下の2点を大切に単元を計画することとした。

1点目は「児童がより良い生活への願いや思いをもてるようにすること」である。これは、「将来を見据え、生活の質を向上させたい」というような大きな意味ではなく、児童が今向き合っている題材に対して「美味しい〇〇を作りたい」や「上手に〇〇してみたい」という願いや思いをもてること捉えた。そのために、児童が興味・関心をもって働きかけられるような題材を用いるなど、学習活動を検討・設定した。

2点目は、学習活動から得られる「気づき」を促すことである。学習指導要領解説では、生活科の学習活動が単なる体験で終わるのではなく、体験を通して気づきを得られるようにすることの必要性が述べられている。また、その気づきの質を高め、それを基に児童が更に考えを深められるようにすることの必要性も述べられている。そのために単元の中で、比較・分類・関係付けなど多様な学習活動を検討・設定した。

2-2 「単元を通して目指す姿」の設定方法について

全体の研究概要にあるとおり、今年度はそれぞれの児童に対して、「単元を通して目指す姿」を設定した。小学部では、各教科等の見方・考え方を意識した授業づくりを行ったため、「単元を通して目指す姿」についても、より各教科等の目標・内容との繋がりが明確になるように、育成すべき資質・能力の3つの柱を参考にしながら設定し、記入することとした。

引用文献

・文部科学省.特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）.開隆堂出版.2019 41

実践報告 1

生活単元学習「クリスマスパーティーをひらこう」

岩淵睦・木皿優・外山小織



■小学部 1 組

1 単元について

(1)単元観

本単元は、12 月の行事であるクリスマスにちなんで、学級のパーティーとそのための準備を主な活動としている。クリスマスは児童に馴染みのある行事であり、意欲や期待感をもって参加しやすい活動である。また、パーティーの準備として、学級で1つのツリーやケーキを作る中で、友達と共同する活動を設定しやすい題材であると考えた。

単元を通して「みんなと一緒に活動する」ことを目指し、友達が取り組む姿や活動の結果に着目しやすくなるように工夫していく。また、授業の導入時にイラストを使ってリー作りやケーキ作りを全員で行えるようにすることで、「みんなで作ると楽しい」「みんなで作ったら素敵なものができた」という思いをもてるようにする。さらに友達と一緒に取り組むことを児童に伝え、活動中は児童が友達の取り組む様子に着目しやすように、活動する順番などを意図的に工夫した。毎時間の授業のまとめでは、一人一人の活動の内容を称賛するとともに完成したツリーやケーキを全員で共有することで、みんなと一緒に作り上げた実感をもてるようにする。単元のまとめとしてクリスマスパーティーを開く際には、「みんなで作って楽しかった」と思えるように、サンタクロース役の教員からツリーやケーキの称賛をされることを通して、活動を振り返れるようにし、楽しい雰囲気を学級全体で共有できるようにしていく。

(2)中心となる各教科等の目標・内容

各教科等	段階	内容のまとめ	
生活	1 段階	キ 手伝い・仕事	教師と一緒に印刷物を配ることや身の回りの簡単な手伝いなどに関わる学習活動
国語	1 段階	A 聞くこと・話すこと	
国語	1 段階	B 書くこと	

(3)単元の指導計画

次	時数	学習活動	教科等	知	思	主
1	1	「クリスマスといえば？」 ○絵本の読み聞かせを聞いてクリスマスについてのイメージをもつ	国語		○	
2	6	「クリスマスパーティーのじゅんぴをしよう」 ○クリスマスツリーのオーナメント作り ○クリスマスリース作り ○招待状作り ○クリスマスケーキ作り	生活		○	○
			国語		○	
3	1	「クリスマスパーティーをひらこう」 ○クリスマスパーティーをひらく	生活	○		

2 学習評価と「単元を通して目指す姿」について

(1)対象児 A について

【単元についての実態】

本児はどの授業にも意欲的に活動に参加することができる。活動の順序を示したり、繰り返し同じ活動に取り組んだりすることで見通しをもって活動することができる。絵本の読み聞かせを聞くことが好きで、読み聞かせを聞きながら絵本を指差ししたり、自分なりに感じたことを言葉で表現しようとしたりすることができる。一方で、手に麻痺があるため、表現したいことを書いて表出する活動には支援が必要である。入学当初は同世代の友達よりも大人とかかわることを好んでいたが、クラスで様々な活動を一緒に経験してきたことで、友達と場を共有して遊ぶことができるようになった。また、友達の名前を呼んだり友達と一緒に手をつないで移動したりすることができるようになってきている。

【単元を通して目指す姿】

- (知) パーティーが楽しい活動であることを知り、パーティーの準備活動を楽しみにしている姿
- (思) パーティーを楽しみにしながら、自分なりに工夫して準備を行おうとしている姿
- (主) パーティーに向けて、教員や友達と一緒に準備をすすめている姿

(2)『『確かな学び』を育む授業づくりの要点』について

本単元では、「友達と一緒に」というキーワードを大切に授業を行った。そのため、座席をゆるやかなコの字の形にして、友達が活動に取り組む姿を常に見えるようにした。また、生活科の「手伝い・仕事」の思いや願いをもてるように児童の興味に沿った食材や飾り付けの素材を用意したり、教員の手本や友達の活動の様子を見たりしたことで「赤（赤い飾りをつけたい）」「生クリーム（しぼりたい）」等の発言を引き出すことができた。

単元を通して、①写真やイラストを見てどのように作るかイメージする。②活動の順番を示す。③実際にやってみる。（もしくは友達の活動の様子を見る）という順番に授業を進行した。単元の導入でクリスマスに関する絵本の読み聞かせを聞いたり、サンタ役の教員と遊んだりしたことでクリスマスへの期待感が高まった。また、保護者へ招待状を作ったことで、友達や家族と行うクリスマスパーティーを楽しみにしながら活動することができた。

①の手立てでは、授業のはじめに一人一人にどのような作品・ケーキを作りたいか4枚の写真から選ぶ活動を取り入れた。写真は、シンプルなケーキから華やかなケーキまで種類の違うものを用意した。選んだ写真に自分の顔写真を貼り、誰がどの写真を選んだのか児童が一目でわかるようにした。学級の児童がそれぞれ違う写真を選んだときには「みんなの作りたいものを全部合わせて1組だけのオリジナルの〇〇を作ろう」と言葉かけをした。そうすることで「みんなで一緒に1つのものを作る」ことを意識できるようにした。

②の手立てでは、活動内容を活動に関連する写真を提示しながら順序だてて説明した。対象児は、活動の順序を整理しながら活動内容を見通す傾向が強いため、この手立ては有効だった。また、児童らが活動する順番を名札カードで示し、順番が来た児童の名札の横に目印として矢印のイラストを掲示したことで、誰の番であるかが明確になり、友達が活動をしている間もその様子を見ながら待つことができるようになった。

③の手立てでは、活動中に使う飾り付けの素材やケーキのトッピングの具材を選べるようにしたこと

で、自分が表現したいものに合ったものを選ぶことができた。また、タイマーで時間を区切ったり、使用する素材の量を決めておいたりしたことで、「終わり」を明確にすることができた。

(3)学習評価

表1 対象児童Aの【生活】の学習評価

【生活】(小学部1段階)				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
キ手伝い・仕事	(イ)	知	簡単な手伝いや仕事に関心をもっている。	クリスマスケーキ作りを通してトッピングの手伝いをすることができた。
	(ア)	思	身の回りの簡単な手伝いや仕事を教師と一緒にしようとしている。	自分が作りたい形や使いたい色を考え、教員と一緒にクリスマスツリーのオーナメントやクリスマスリースを作ることができた。
		主	簡単な手伝いや仕事に関心をもち、自分から活動しようとしている。	順番を提示したことで、待っている時間に友達の様子を観察し、やり方を知り、自分の順番がきたときに自分なりに活動に参加することができた。

表2 対象児童Aの【国語】の学習評価

【国語】(小学部1段階)				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
B書くこと	イ	思	文字に興味をもち、書くようとしている。	パーティーの招待状を渡すことを楽しみに、文字をなぞって書くことができた。

(4)「単元を通して目指す姿」の評価

(知) パーティーが楽しい活動であることを知り、パーティーの準備活動を楽しみにしている姿
⇒友達や教員の様子をみてクリスマスケーキにトッピングをするという活動内容を理解し、自分の番のときにトッピングしたい食材を選んでケーキにのせることができた。(写真1)

(思) パーティーを楽しみにしながら、自分なりに工夫して準備を行おうとしている姿
⇒右麻痺による手先を使う活動への苦手意識があったが、招待状作りではパーティーに家族が来てくれるとわかったことで、それを楽しみにマスキングテープを画用紙に貼ったり雪だるまに顔を描いたり、プリントの文字をなぞったりして招待状を作ることができた。教員が「誰に来てほしい？」と尋ねると妹の名前を答えた。パーティー当日は、家族と一緒にケーキのトッピングを楽しむ様子がみられた。(写真2)

(主) パーティーに向けて、教員や友達と一緒に準備をすすめている姿。
⇒クリスマスリース作りでは、自分が飾りたいものを選んで飾ることができた。クリスマスツリーの飾り作りでは、粘土の型抜きを教員と一緒にいき、作ることができた。また、パーティー前日に教員や友達と一緒にクリスマスツリーを飾りつけることができた。(写真3)



写真1 クリスマスケーキに
フルーツをトッピングする姿



写真2 招待状を書こうとする姿



写真3 クリスマスツリーを
飾りつける姿

3 「確かな学び」について

■「確かな学び」の見取方法

児童Aの「確かな学び」の姿として、本単元を通して目指す姿が、他の場面でもみられるようになるという視点から以下のように設定した。

- ①教員や友達が活動している様子を見て、自分もやってみようとする事
- ②行事や誕生日会等にむけた活動に見通しをもち、自分なりに準備をすすめる事

また、見取の方法としては、担任を中心に行動観察を行うことにし、特定の場面に限定せずに気付いたことを記録するという方法をとった。

■「確かな学び」の評価

①については、休み時間に絵本を読んだ際に、教員や友達が大きな声で絵本の台詞を言うと、それを真似して楽しむ様子がみられた。また、汚れることは苦手としている本児であるが、図工の授業では教員が色を混ぜて色水を作って思いきり紙にかける様子や、友達が裸足になって絵具の入ったバケツに飛び込んだりする様子を見て、真似して活動しようとする様子がみられた。

②については、友達の誕生日会で、教員の手本や友達の様子を見たことで活動内容が分かり、フルーツの盛り合わせを作る等、誕生日会の準備を進めることができた。また、交流会のプレゼント作りでは、学習の導入で「お友達にありがとうの気持ちを伝えるためにプレゼントを作ろう」と話しをしたところ、友達の写真を指さして相手を意識し、見通しをもって活動に取り組むことができた。

4 本研究の成果と今後の課題

○成果

- ・昨年度から「単元計画評価シート」を使用し、単元の指導計画を作成してきたことで、前・後期の授業計画に記載した各教科等の目標・内容を基本とし、学習活動から違和感なく指導計画を作成することができた。
- ・取り扱う各教科等の目標・内容を整理することができ、各教科等の目標をふまえた授業のねらいや内容を工夫しながら授業を行うことができた。
- ・単元において児童の目指す姿が整理され、担任間で共有することができた。その結果、順番を待ちながら友達の良いところを見て真似しようとする姿や、苦手な活動でも挑戦してみようとする姿が対象児をはじめ、どの児童にも見られ、単元を通して「みんなで一緒に作る」という経験を積むことができた。
- ・保護者から「家に飾ってあるクリスマスツリーに初めて興味を示す姿が見られた。」という話をいただいた。このことから、学校で学んだことが家庭生活にも活かしていることがわかった。

○今後の課題

- ・「単元を通して目指す姿」を設定したが、育成すべき資質能力の3つの柱で厳密に分けて考えることが難しかった。
- ・今年度の研究を通して、自分の中で児童の思いや願いを引き出すための手立ての種類が少ないと感じた。どうしたら児童が思いや願いを引き出すことができるのか考えていきたい。

実践報告 2

生活単元学習「おこめだいへんしん～のりまきをつくろう～」

神保まなみ・佐藤孝



■小学部 2 組

1 単元について

(1)単元観

本単元は、日々の食卓や給食にも頻繁に登場する米を題材としている。米は様々な調理方法で変化することから、その変化の面白さを味わいながら取り組める題材である。本単元は、調理を中心的な活動としているため、【生活】「キ手伝い・仕事」の内容と関連付けて学びやすい。また、調理の際には具材や道具の名前をはじめとし、手順を理解したり活動を調整したりするために、擬音語や状態を表す端的な言葉を用いることから【国語】の「A言葉の特徴や使い方」を合わせて学ぶことができる。学んだ言葉への理解を活かし、「A 聞くこと・話すこと」の「簡単な事柄と語句を結び付けたり、語句などから事柄を思い浮かべたりしている」姿に繋げることもできる。前時には、米からせんべい作りに取り組んだ。

今回取り組む「のりまきをつくろう」は、調理の工程の中で、ごはんの厚みを表す言葉や動作を調整する動きに関する言葉を含む取り組みとなる。調理の学習では、やり方がわかるよう動作をイメージしやすい擬音語を交え、手本を示すことで言葉と動作の結びつきに気づけるようにしたい。また、言葉と動作が適切に結びついた状態を提示したり、言葉に合わせて動作を行える機会を増やしたりできるように、布で作ったのり巻きを練習用として使用する。歌や手遊びが好きな児童も多いことから「のりまきソング」を使って、調理に関わる動作などを確認する取り組みも計画した。手本や手順書などの視覚支援を必要とする児童も多いことから、学習活動全般が子どもにとってわかりやすい環境になるよう調節し、自分でできることがひとつでも増えるよう指導を行っていききたい。

(2)中心となる各教科等の目標・内容

各教科等	段階	内容のまとめ	
生活	2 段階	キ 手伝い・仕事	人の役に立つことのできる手伝いや仕事に関わる学習活動
国語	2 段階		A 言葉の特徴や使い方
	2 段階		A 聞くこと・話すこと

(3)単元の指導計画

次	時数	学習活動	教科等	知	思	主
1	2	「おこめがのりまきにへんしん」 ・ごはんがのり巻きになることを知る ・教員と一緒にのり巻きを作って食べてみる	生活		○	
			国語	○		
2	7	「せんせいとのりまきをつくろう」 ・のり巻きづくり（いろいろな道具、具材を使って） ・調理後、道具を流しに片付ける ※「はま寿司」で食事をし、寿司に親しめるようにする ※「寿司割烹 山水」でのり巻きづくりを体験する	生活		○	
			国語	○		
3	4	「じぶんでのりまきをつくろう」 ・のり巻きづくり（さらに具材を増やして） ・道具、材料の準備、後片付け ・振り返り（写真を見ながら動作と言葉を結び付ける等）	生活	○		
			国語		○	
4	2	「のりまきパーティーをしよう」	生活			○

- ・のり巻きづくり（教員のリクエストを聞いてつくる）
- ・道具、材料の準備、後片付け
- ・教員とのり巻きを食べ、気持ちなどを共有する

国語

○

2 学習評価と「単元を通して目指す姿」について

(1)対象児 G について

【単元についての実態】

調理に興味があり、言葉かけの他、写真やイラスト、手本などの手がかりを示すことで、活動内容を理解し取り組むことができる。

言葉の理解について、授業で繰り返し取り扱った材料等の名前を覚えて言う様子が見られる。また、慣れた場面では簡単な指示に応じて、行動することができる。

【単元を通して目指す姿】

- (知)米がいろいろな料理になることがわかり、それに関わる調理、道具の準備や片付けに取り組んでいる姿
 (思)学習した知識・技能を使って、自分の思いを表現しながら調理等に取り組んだり、工夫したりする姿
 (主)調理に関わる言葉を自ら使ったり、言葉によって見通しをもったりしながら、米やのり巻きに関する活動に意欲的に取り組んでいる姿

(2)『「確かな学び」を育むための授業づくりの要点』について

- ・擬音語を活かした調理方法の理解や活動調整力など、これまでの学びを活用できるようにする。
- ・「練習用のり巻き」（フェルトで作った教材）を使い、動作と言葉の結びつきを確認できるようにする。
- ・「のりまきソング」（「いとまき」の替え歌）を取り入れ、楽しく言葉を学べるようにする。
- ・振り返りでは、写真を見ながら動作と言葉が結びついていることを確認できるようにする。

<生活科の見方・考え方に迫るために>

☆「より良い生活」への願いや思い

- ・児童らが「知りたい！」「もっと美味しく食べたい！」という思いをもてるように、米への興味関心を活かした学習活動を設定する。
- ・児童らが「職人さんの様に作りたい！」という思いをもてるように、近隣の「寿司割烹 山水」での見学、体験を設定する。（写真1）
- ・自分だけのオリジナルのりまきを作りたいという思いをもてるように、お店にはない具や複数の具の組み合わせで作れるようにする。

☆児童の「気づき」を促す

- ・米を炊くとごはんになる様子を毎回見て確認することで、その変化に気づくことができるようにする。
- ・複数の道具（巻きす、クッキングシートなど）や具材を扱うことで、扱いやすさや味などを比較する機会をつくる。
- ・児童が調理活動に取り組む様子を見守ったり、写真を見ながら調理の活動について振り返ったりすることで、児童がどんなことに気づくのか把握する機会を設ける。



写真1
寿司割烹山水にて
のりまきづくり
体験

(3)学習評価

表1 対象児童 G の【生活】の学習評価

【生活】(小学部2段階)			
内容のまとめ		評価規準	単元の評価
キ手伝い・仕事	(イ)	知	簡単な手伝いや仕事について知っている。
			準備では写真を見ながら道具や材料を揃えていた。調理では、手順に沿って自分でのり巻きを作っていた。具材をおおむね真中に置いたり、のりの端と端をくっつけたりと、工程ごとのやり方への理解も深まったようだった。

【国語】(小学部2段階)				
内容のまとめり		評価規準		単元の評価
ア 言葉の 特徴や 使い方	(ア)	知	(ア)身近な人との会話を通して、物の名前や動作など、いろいろな言葉の種類に触れている。	今まで取り扱った米料理やお菓子の写真を見て、その名前を発言していた。「ぎゅっぎゅっ」の言葉かけを受け、手に力を入れる様子があったり、巻く工程の写真を見て、「ぎゅっぎゅっ」と発言したりすることもあった。
A 聞くこと・ 話すこと	(イ)	思	ア 身近な人の話に慣れ、簡単な事柄と語句などを結び付けたり、語句などから事柄を思い浮かべたりしている。	振り返りでは、場面写真と「まぜまぜ」「ぎゅっぎゅっ」の言葉に対応させていた。取り扱い道具、具材では、「かんぴょう」「お酢」「巻きす」の名前を覚え発言していた。教員の「のりざらざら」という言葉を受け、のりの表面を触る様子、「端」の言葉かけを受け、のりの端を指さす姿が見られた。
	(ウ)	主	学んだ言葉を通じて活動をしたり、学習の見通しをもって思いをもったりしながら言葉を使おうとしている。	のり巻きづくりで扱う具材に関して自分からの発言が多かった。教員がのり巻きソングを歌うと、「ぎゅっぎゅっ」と手に力を込めたり、「端と端を（がっちゃん）」の歌詞の部分では、のりの端を指さしたりと、言葉に関して理解したことを活かしながらのり巻きづくりに取り組む様子が見られた。

(知)米がいろいろな料理になることがわかり、それに関わる調理、道具の準備や片付けに取り組んでいる姿
⇒炊きあがる前の米を見て「お米」、炊きあがったものを見て「ごはん」と発言し、米の変化に気づいていた。

(思)学習した知識・技能を使って、自分の思いを表現しながら調理等に取り組んだり工夫したりする姿
⇒擬音語での言葉かけや動作がわかる歌に応じた動きをしながら調理をしていた。(写真2)

「ざらざら」と言いながら、のりの手触り（表裏の理解はまだ難しい）を確認するように触れていた。



写真4 振り返しシート

3 「確かな学び」について

■「確かな学び」の見取方法

- ①授業時間外での様子（教室内に単元に関する掲示をしておく、単元の学習に関する投げかけをする中でどのような姿や発言が見られるか）
- ②保護者からの聞き取り

■「確かな学び」の評価

①授業時間外で見られた姿

- ・のり巻きの掲示物を見て「かんぴょう」「しゃけ」など笑顔で発言する様子が見られた。
→好きなものについて自分なりに表現する姿から、興味関心の幅が広がったのではないかな。
- ・砂遊びの場面で、ケーキやアイスに見立てて遊ぶことが多いが、教員が「のり巻きソング」を歌いながら、そばで遊んでいると、隣で一緒に歌いながら、のり巻きに見立てて砂遊びをしていた。
→学んだことと遊びを関連させている。遊びを発展させている。
- ・砂遊びの中で、「ぎゅっぎゅっ」と言いながら手に力を入れていた。「端と端を（がっちゃん）」の歌詞に合わせて、砂のまとまりの端と端を指さす様子が見られた。
- ・着替えの際、「端と端をがっちゃん」の言葉かけを受け、服の端と端を概ね合わせる姿が見られた。
→のりまきづくりのイメージをもって遊んでいた。また、学んだ言葉と動作、学んだ言葉と位置を結び付けられていたのではないかな。

②保護者から聞き取った姿

- ・登校中に笑顔で「のり巻き」「だまこ汁」など本単元で取り組んだ調理に関する発言をしていた。
→いろいろなものの名前を覚えてきている。好きなものや好きになったものについての思いを自分なりに表現しているのではないかな。
- ・家でもキッチンに来て、調理に取り組もうとする様子が見られた。
→学校で調理に取り組んだことで、家でも自分からやろうとする姿が見られたのではないかな。

4 本研究の成果と今後の課題

○成果

- ・単元の中で学習する教科等を明確にし、学習活動、支援方法などを検討したことで、担任間で目標や支援について共通理解をして実践をすることができた。また、評価基準の姿に向かうというゴールを明確にしたことで、児童の目標達成に向かうため、その都度支援の方法を見直し実践することができた。
- ・授業について検討する際に、単に「よい授業に向けて」と考えるのではなく「教科の学びを深めるためには」という視点で意見をもらうことができ、授業改善につなげることができた。
- ・授業後、振り返りながら「単元評価シート」に記入していくことで、児童の小さな変化に気づくことができた。

○今後の課題

- ・「単元評価シート」の◎○△といった記号での評価が難しい。研究協議会でいただいた意見として、ルーブリック評価（評価する姿を3段階程度で設定しておく）にしておくこともよいのではないかな。
- ・各教科等の学びを保障するため、学習指導要領を読み解くなど、さらなる自己研鑽が必要である。
- ・各教科等についてバランスよく学べているか、随時確認しながら学習を計画、実践する必要がある。
- ・ゆっくり学んでいく児童の姿を見ていると、単元の時間を十分にとったりいろいろな授業で関連させたりしながらじっくり学んでいけるとよいと考える。そのため、「確かな学び」につなげるための単元の計画、他授業との関連についてはさらに検討し、実践していく必要がある。

（例）のり巻きづくりで、のりの「ざらざら」とした手触りを確認している姿

→おべんきょうタイムで、いろいろな手触りを体験しながら言葉と結び付けていく学習などを組むことで、理解の芽生えが見られる部分について、取り出して学ぶ機会を設定する。

実践報告 3

生活単元学習 「3くみどリーむショップをひらこう！」

三浦光里・吉野時緒



■小学部 3 組

1 単元について

(1)単元観

本単元では、物を介したやり取りができる場面を多く設定できる「お店」をテーマにし、「3組どリーむショップをひらこう」という学習活動を設定した。これまで本学級では、高学年として「一人で取り組む」「最後まで頑張る」などの目標を掲げ学習に取り組んできた。調理や制作など様々な学習活動を通し最後まで頑張る力が身についてきた。また手順表や手本の提示などを見たり繰り返し取り組んできたりしたことで、児童の多くがやることを理解して取り組めることが増えてきた。調理や制作活動を行う中で、年度当初は「自分の物」や「自分の事」に取り組んで終わりだったが、次第に「お母さんにも食べてもらいたい」「〇〇ちゃんにあげたい」など児童が自分から相手に対して「～したい」と言う姿が見られるようになってきた。このような「自分でできた」という体験を繰り返し経験してきたことで自信が付き、身近にいる友達や大人に対しても「～したい」と思えるようになったのではないかと考える。

導入では児童の関心意欲を高めるために、児童が自分の好きなものを考えたり、やりたいこと、作りたいものを決めたりする活動を取り入れた。簡単な工程で作れる「商品」を事前に提示して児童自身が選択できるようにすることで、児童が意欲的に取り組めるようにしたい。商品がいくつかできたところで、お客さんとのやり取りを練習する場を設け、児童が相手のことを考えたり自分の言葉で伝えたりできるようになることを目指していく。「お店屋さん」としての適切な挨拶や言葉遣いを〇×クイズ等を用いてゲーム感覚で確認したり、ロールプレイングをしたりしながら、児童が自分なりに適切な言葉遣いや表現で伝える姿を目指していく。

(2)中心となる各教科等の目標・内容

各教科等	段階	内容のまとめ	
生活	3 段階	オ 人との関わり	身近なことを教師や友達と話すことなどに関わる学習活動
生活	3 段階	キ 手伝い・仕事	自分から調理や制作などの様々な手伝いをすることや学級の備品などの整理などに関わる学習活動
国語	3 段階	A 聞くこと・話すこと	

(3)単元の指導計画

次	時数	学習活動	教科等	知	思	主
1	1	「3くみどリーむショップをひらこう」 ・ぼく、わたしの好きなこと、もの	生活	○		
			国語		○	○
2	8	「かいてんにむけて、じゅんぴをしよう」 ・なんの おみせを だすのか きめよう ・しょうひんをつくろう	生活	○		○
			国語			○
3	3	「かいてんにむけて、じゅんぴをしよう」 ・かんばんをつくろう ・ともだちと こうたいしながら れんしゅうしよう【本時】	生活	○		
			国語			○

4	1	「おきゃくさんを よんで オープンしよう」 ・ふりかえりをしよう	生活	○	○	
			国語		○	○

2 学習評価と「単元を通して目指す姿」について

(1)対象児 O について

【単元についての実態】

児童 O は、周りの大人や友達が好きで自分から関わろうとする姿が見られる。しかしながら会話が一方的になったり、友達が大人から褒められる場面で、相手に対し否定的な表現をしてみせたりすることがある。見立て遊びをしたり好きな役になりきって遊んだりすることが好きで、休み時間にも友達や教員を誘って楽しんでいる。また、言葉は不明瞭ながらも、自分なりの表現で気持ちや欲求を伝えることができる。活動には意欲的に取り組もうとするが、長時間集中することや相手とのやりとりを交えた活動には課題があり、活動の終わりが分からない時や自分の思い通りにいかない場合にその場で固まってしまうたり活動に向かうのに時間がかかったりすることがある。

【単元を通して目指す姿】

(知) 活動の内容を理解し、最後まで取り組む姿

(思) 自分の好きなものを相手に伝えたり、相手の好きなものを受け入れたりする姿

(学) その場に合った挨拶や身振りなどの表現で周りの人と関わる姿

(2)授業づくりの要点について

児童 O の実態から、「お店屋さん」の活動を設定することで、児童が見立て遊びをしながら友達や大人とやりとりすることを通し、適切な表現を身につけて関わることをできるのではないかと考えた。活動の中で、かわいいものやビーズなど児童が好きなものや活動手順を写真やイラストで提示することで、児童が活動に向かう意欲づけや活動の内容の理解を促し、児童が「好きなもの」「一人でできるもの」「児童だけのお店」という特別感をもたせることで出来上がった後の達成感が感じられるように設定した。また「お店屋さん」として商品を作るうえで、児童が自分の思いを適切な表現で相手に伝えたり相手の言葉や好きなものを受け入れたりすることができるよう、必要な材料を教員に伝えたりお客さんの言葉を受け止めたり、友達がつくる商品やお客さんを意識したりする場面を繰り返し経験できる場面を設定した。

(3)学習評価

表 1 対象児童 O の【生活】の学習評価

【生活】(小学部3段階)				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
オ 人との関わり	(イ)	知	身近な人との簡単な応対などをするための知識や技能を身につけようとしている。	当初は友達や大人に対して否定的な表現をしてしまうことがあったが、教員の手本を見て真似することを繰り返していくうちに、自分なりに応対する姿が見られるようになった。
	(ア)	思	身近な人と自分との関わりが分かり、一人で簡単な応対などを行っている。	自分の役割を理解し、お店の準備の仕方は手本を見ながら確認したことで、教員の手を借りなくとも自分で看板を設置したり、看板の絵を見ながら商品を並べたりすることができた。
		主	友達や大人に自分から声をかけたり自分なりの表現でやりとりをしたりしようとしている。	友達の作る商品を見て「かわいい」と褒めたり、お客さん役の友達にお勧めしたいものを自分なりの表現で伝えたり、手招きや「おーい」と声をかけてお客さんを呼び込んだりする姿が見られた。

表2 対象児童Oの【国語】の学習評価

【国語】(小学部3段階) A 聞くこと・話すこと				
内容のまとめ		評価規準		単元の評価
A 聞くこと・話すこと	(ア)	知	身近な人の話しかけや会話などの話し言葉に慣れ、言葉が、気持ちや要求を表していることを感じている。	友達から商品を褒められると「うん」「グー！(親指を立てる)」などの反応をしたり、お客さんから「おすすめは？」と尋ねられ、自分なりにお勧めの商品を紹介したりできるようになった。
	カ	思	相手の話に関心をもち、自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の思いや気持ちを受け止めたりしている。	自分が作りたいブレスレットを作っていることが多かったが、お客さんからの「指輪がほしい」「ネックレスがほしい」という要望を聞き、教員に「ゆびわ」「これ(ネックレスの身振り)」と伝え、要望に応えようとすることができるようになった。
		主	自分の気持ちや考えを相手に伝えたり、相手の好きなものを受け止めようとしていたりしている。	学級のなかで毎時間の成果を確認し合うことを繰り返し、徐々に友達の頑張りに拍手することができるようになった。また友達が作った商品に対し「かわいい」や「グー！(親指を立てる)」「すご！(すごい)」などの言葉や身振りで伝えたりすることができるようになってきた。

(4)「単元を通して目指す姿」の評価

(知)活動の内容を理解し、言葉や身振りで表現の方法や身近な友達や大人が好きなものに気付く姿

活動当初は、自分の好きなようにブレスレットを作り、お客さんとして来店する予定の相手を意識する様子はほとんど見られなかった。次第に「お店屋さん」を開くことに見通しをもち、「友達にあげたいブレスレット」を作るようになった。お店屋さんの練習でお客さん役の教員から「指輪が欲しいわ」「ネックレスはないの？」などの要望を受けると、身振りと自分なりの言葉で「今度は指輪をつくる」ことを伝え、次の活動の時間には教員に「ゆびわ」「ネックレス」と作りたいものを伝えることができた。また学級の友達が他学級の友達の好きなものについて話すのを聞き「あ！」「すき(胸の前でハートを作る)」などの反応をして見せ、周りの人の好きなものにも気付くことができた。



(思)その場に合った適切な言葉や表現で友達や周りの大人とやりとりをする姿

活動当初は、別の児童の商品が教員に褒められたり、みんなで成果を確認し合ったりする場面で、自分だけに注目が集まらない事に対して怒った表情や声を出したり、不満を表したり否定的な表現を見せたりする姿があった。しかし毎時間学級のみんなで成果を褒め合ったり他学級の友達が好きなものを知って言ったりすることで、褒め合う嬉しさや楽しさを感じ徐々にマイナスな表現が減ってきた。別の児童が作る商品を見て「わぁ！」「かわいい！」「グー！(親指を立てる)」などの肯定的な表現が見られるようになってきた。お店をオープンした際には、「おすすめはありますか？」と尋ねられると、自分なりの表現でブレスレットや指輪をおすすめする姿が見られた。



(主)自分から相手と会話をしたり物の受け渡しをしたりしようとする姿

実際の練習や教員の手本を見て適切なやり取りの方法を繰り返し確認してきたことで、お店の店員としての役割を理解し、活動に自分から向かう姿が多くみられるようになった。お店を開店した際には、自分からお客さんを「おーい」「おいでおいで」と呼びこんだり、特定の友達のことを考えて作った商品を「おすすめ」として渡したり、自分たちで作ったお金(ドリームマネー)と引き換えに商品を手渡したりすることができるようになった。また帰っていく友達や大人に「ありがとうございました」と元気に挨拶することもできた。



3 「確かな学び」について

(1)「確かな学び」の見取方法

児童0の「確かな学び」の姿として、「単元を通して目指す姿」が他の場面でもみられるように以下の2点について場面を設定した。

- ① 活動に見通しをもち最後まで活動に取り組めること
- ② 周りの友達や大人の思いや言葉を受け入れ、適切な表現でやりとりができること

見取の方法としては、担任を中心に、学級内での係の仕事や休み時間などの主に日常生活場面で行動観察を行うことにした。気付いたことを担任間で報告し合う方法をとった。

(2)「確かな学び」の評価

- ① 係の仕事の内容をイラストで提示し、本人が活動の手順を理解し取り組めるよう設定したところ、自分の役割を理解し、手順の通りに係仕事をすすめ、最後まで自分で取り組むことができるようになってきた。
- ② 「お手伝い」の場面を多く設定し、友達や大人とやりとりをする場面を設定したところ、友達や大人から「お願いします」「ありがとう」などの言葉をかけられる機会が増え、本人の相手の思いや言葉を受け止めるのに有効であった。また以前よりも教員に「せんせい」と自分から多く話しかけ、困っていることや聞きたいことなどを伝えようとする姿が見られるようになった。

4 本研究の成果と今後の課題

○成果

- ・「単元計画シート」の活用によって、本単元でどの教科等を扱い、何をねらうのかを明確にしながら授業づくりに取り組めた。シートの内容と実践している活動との差異や児童の目標を改めて確認したり授業の進め方を改善したりするのに有効であった。
- ・「確かな学び」とは何か、児童の目指す姿をより細かく具体的に考えるのに役立った。
- ・「単元評価シート」に毎時間簡単な評価と達成度を記入し積み重ねてきたことで、児童の活動への理解や目標の達成度などの変化を見て取ることができた。
- ・自分自身が単元計画を立てる上で、教科等を合わせて指導することを意識することができたとともに、扱っている教科等の偏りに気付くことができた。

○今後の課題

- ・「単元計画シート」によって、単元に含まれる教科等が明確になったが、生活単元学習では「国語」「生活」を扱うことが多くなってしまっている。
- ・対象児童についての評価を丁寧にできたものの、学級の児童全員分の評価を記入するとなると時間を有してしまい、日々の授業づくりや評価の場で実践していくのがやや難しい。
- ・教科等の内容を網羅しようと意識しすぎてしまうと、児童の実態や目指す姿にそぐわない活動内容になってしまうこともある。

Ⅲ 研究のまとめ

1 『『確かな学び』を育むための授業づくりの要点』の成果

小学部では、『『確かな学び』を育むための授業づくり』として、「各教科等の見方・考え方」をより意識した授業づくりを実践した。

研究を進めるにあたり、授業づくりにおいて教員が「各教科等の見方・考え方」を意識するために、学習指導要領教科解説各教科等編の「指導計画の作成と内容の取扱い」等を参考にして、単元や授業を計画する際に配慮したい事項を考えた。それらをもとに、実際の単元・授業における工夫などを検討、実践した。その結果、実践報告では、以下のような意見が得られた。

- ・「生活」に関わる思いや願いをもつための方法を深く考えることができた。各教科等の目標をふまえた授業のねらいや内容を工夫しながら授業を行うことができた。
- ・授業について検討する際に、「教科等の学びを深めるためには」という視点で検討することができ、授業改善につなげることができた。

これらの意見から、各教科等の見方・考え方をより意識することは、各教科等の目標・内容をただ扱うのではなく、その教科等のねらいや目標を踏まえて、それらをどう身に付けるか、達成するかといった具体的な活動内容や教材・教具、支援を検討・改善することにつながると考えられる。

2 「単元計画評価シート」活用の成果

「単元計画評価シート」を用いたことで、単元計画の作成や評価において、以下の2点の成果が得られた。

2-1 単元計画の作成について

(1) 単元計画の考え方の深まり

各教科等の目標・内容を明確にした単元計画の作成について、実践報告では以下のような意見が得られた。

- ・前・後期の授業計画に記載した各教科等の目標・内容を基本としながら学習活動から違和感なく単元計画を作成することができた。
- ・「単元計画シート」の活用によって、本単元で何の教科等を扱い、何をねらうのかを明確にしながらか授業づくりに取り組めた。シートの内容と実践している活動との差異や児童の目標を改めて確認したり授業の進め方を改善したりするのに有効であった。
- ・単元計画を立てる際に、扱っている教科等の指導をより意識することができたとともに、扱っている教科等の偏りに気付くことができた。

昨年度、一昨年度の課題として、各教科等を合わせた指導において、中心的に扱う教科等の目標・内容の設定が課題として挙げられていた。具体的には、取り扱おうとしている教科等の数が多すぎたり、教科等を意識しすぎるあまり「合わせた指導」のねらいがわかりにくくなったりしたことなどである。今年度は学部内で「授業計画で計画した教科等の内容をもとに、活動内容に合わせて調整する」

という共通理解が図られ、事前に調整を行えたことで、無理なく教科等の内容を取り扱うことができたと考えられる。

また、前述した実践報告における意見をもとに、学部内で話し合いを進めたところ、以下のような意見が挙げられた。

- ・ 3年間の研究を通して「合わせた指導」への考え方を見直すことができ、「合わせた指導」における、より効果的な教科の取り扱い方を明らかにすることができた。

本研究の1年次は、1単位時間に含まれる各教科等の目標・内容の分析を行ったが、1単位時間の中で複数の教科等を取り扱おうとする教員が多かった。しかし、研究を重ねるに連れて、単元を通して複数の教科等を取り扱うように考え方（1単位時間では1つの教科等のみ扱うこともある）が整理されたり、資質・能力の3つの柱で分けられた目標・内容を、単元を通して効果的に配置させる方法を考えたりすることができるようになった。これらのことから、単元計画において取り扱う教科等の目標・内容の明確化は、単元の捉え方や教科等の内容の配置の仕方など、単元計画の作成における教員の理解を深め、児童の学びやより効果的な指導への改善への意識を高めることに効果があると考えられる。

(2)教員間の連携・共通理解の深まり

担任間の連携について、実践報告では以下のような意見が得られた。

- ・ 単元において児童の目指す姿が整理され、担任間で共有することができた。
- ・ 単元の中で取り組む教科を明確にし、学習活動、支援方法などを検討した。担任間で支援について共通理解をして実践をすることができた。

これまでも授業者間で連絡や情報の共有は行われてきたが、単元を通して各教科等の目標・内容をどのように扱っていくか、また、個々の教員の各学習活動への思いや考えなどを授業者全員で検討・共有するのに、「単元計画評価シート」が効果的だったことがわかる。「単元計画評価シート」では、単元のねらいや取り扱う教科等、児童の評価規準などが明文化されており、シートを共有することが、教員間の連携・共通理解を深める上で効果的であったと考えられる。

2-2「単元を通して目指す姿」について

本研究では、単元を通したねらいを明確にするため、「単元を通して目指す姿」を設定した。実践報告では、以下のような意見が得られた。

- ・ 単元において児童の目指す姿が整理され、担任間で共有することができた。その結果、単元としてのねらいを意識しながら授業を行うことができた。

本研究では、各教科等の目標・内容の評価に焦点を当ててきたが、教科等の内容の取扱いを意識しすぎるあまり、本来「合わせた指導」として大切にしてきた生活の文脈からそれてしまい、単元を通して目指す児童の姿やねらいをもちにくくなる様子も見られた。しかしながら、あらかじめ「単元を通して目指す姿」を設定したことで、各教科等の目標・内容を適切に取り扱いながら、生活の文脈や単元としてのねらいも意識した「合わせた指導」としての単元計画を作成し、実践できるようになったと考えら

れる。

3 今後の実践に向けての課題

3-1 『『確かな学び』を育むための授業づくりの要点』の課題

『『確かな学び』を育むための授業づくりの要点』として、各教科等の見方・考え方をより意識した単元・授業の計画の作成について、実践報告では以下のような意見が得られた。

- ・生活科の見方・考え方を意識して授業を組み立てた結果「思いや願いを引き出すための授業」になった。生活科の「考え方」にあった授業にはなっているが、「見方」は授業にあまり取り入れられなかった。国語の見方・考え方はあまり意識できなかった。
- ・児童が思いや願いをもてるようにするための手立ての引き出しが少なかった。どうしたら児童が思いや願いをもてるのか考えていきたい。

今年度の研究では、各教科等の見方・考え方を授業づくりの要点として取り上げ、特に、生活科と国語科に焦点を当てて検討した。実践報告からは、教科等の見方・考え方を踏まえた単元計画・授業づくりに難しさを感じた教員もいたことがわかる。これは、教員の各教科等の専門性や見方・考え方に関する理解の不足が要因の1つであったと考えられる。子どもたちが授業で各教科等の見方・考え方を発揮できるようにするには、教員自身が見方・考え方を理解した上で、一人一人の子供の状況や発達段階について合わせてそれらを引き出す手立てを工夫することが重要になる。今後は各教員が研修などを通して、それぞれの教科等に対する専門性を高めていくことが重要だと考える。

3-2 「単元計画評価シート」について

「単元計画評価シート」を用いる上での課題として、主に以下の2点が挙げられた。

(1)「単元を通して目指す姿」の設定の課題

小学部では、各教科等の目標・内容の繋がりを明確にするため、「単元を通して目指す姿」を設定する際に、育成すべき資質・能力の3つの柱を参考にして関連付けながら3つの姿を設定した。この設定方法について、実践報告では以下のような意見が得られた。

- ・目指す姿をたてたが、3つの柱をもとにして考えることが難しかった。

この意見に加えて、学部内での話し合いでも、目指す姿を3つの柱に、厳密に分類することが難しいという意見もあげられた。今後は育成すべき資質・能力の3つの柱についての理解を深めながら、「合わせた指導」の特性をふまえ、「単元を通して目指す姿」について、小学部としての考え方を整理していく必要がある。

(2)評価の記録方法の課題

学習評価の記録方法について、実践報告では以下のような意見が得られた。

- ・「単元計画評価シート」の記号での評価が難しい。研究協議会でいただいた意見で、ループリック評価（評価する姿を3段階くらいで設定しておく）にしておくこともよいのではないかと。
- ・対象児童についての評価を丁寧にできたものの、学級の児童全員分の評価を記入するととなると時間を有してしまい、日々の授業づくりや評価の場で実践していくのがやや難しい。

「単元評価シート」には1授業あたりの評価を◎・○・△の3つの記号で達成度合いを段階的に評価を記録できる欄を設けた。この評価の記録欄は必ず記入するものではなく、毎時間の形成的な学習評価を記録する方法の1つとして、授業者が必要に応じて活用することになっていた。しかし、この評価の記録欄について共通理解が不足していたことや、日常的に学習評価を記録するにあたって評価の判断の基準が明確でなかったことなどが要因となり、このような意見があげられたと考えられる。取り扱う教科等に設定している評価規準だけでなく、評価の判断の基準を明確にし、個々の児童の実態に合わせてより効果的に、かつ効率的に学習状況を評価できるように、評価シートの内容や活用方法について改善していく必要がある。

3-3 「確かな学び」の見取り方の課題

「確かな学び」の評価について、実践報告では以下のような意見が得られた。

- ・ゆっくり学んでいく児童の姿を見ていると、単元の時間を十分にとったりいろいろな授業に関連させたりしながらじっくり学んでいけるとよいと考える。そのため、「確かな学び」につなげるための単元の計画、他授業との関連についてはさらに検討し、実践していく必要がある。

また、上記の意見を踏まえ、小学部で話し合いを行う中で、以下のような意見も挙げられた。

- ・小学部段階では学んだ内容を即座に日常生活やその他の場面へ活かすことは難しい。つまり「確かな学び」が育まれたということを判断するには時間がかかる。
- ・次年度以降を見据え、長期的な視点で取り組んでいく必要があるのではないかと。

小学部段階では、1つ1つの学びの定着に時間がかかるため、それらを「確かな学び」として生活に汎化したり、他の学習場面で活用したりすること、またそれらを見取れるようになるまでにはより時間がかかることが予想された。そのため、1つの単元の終了後に評価するだけでなく、他の単元や年度をまたいだ指導なども見据え、それぞれの学習内容を互いに関連させながら継続的に評価を行う重要だと考えられた。

今後は、長期的な視点で指導に取り組んでいくことを念頭に置いた指導計画を立案するとともに、児童の「確かな学び」をどのように見取ることがよいかについても検討していきたい。